2015.11.25

（第３種郵便物認可）

日報論壇

いじめ対策 正しい知識を

高橋寿美子

1980年代にいじめが社会問題になってから、子どもの自死の悲劇が繰り返されています。最近のケースでは、事後のアンケート調査で「いじめに気付けないおとな」や「相談できない子ども」の実態があらためて明らかになっています。

名古屋市の中1の男子生徒が自死した問題では、日頃の校内記名アンケートには何も記載がなく、事後の無記名アンケートでは20人の生徒がいじめを直接見て、57人が伝聞で知っていたといいます。

さらに、「いじめられる方も悪い」「やり返しなさい」「いじめに耐えて頑張った」「いやなことも我慢する強さが必要」などという強者の声が大きければ、相談することは難しくなるでしょう。

記名では本音が言えない子どもの心理を理解し、無記名アンケートで本気でいじめに向き合おうとすることが必要なのでしょう。「相談しよう」と呼びかけられても、本当に話を聴いてくれるのか、いじめにどう向き合ってくれるのかがわからなければ、不安で相談はできないでしょう。

「いじめ対策 正しい知識を」

子ども時代のいじめ体験者（傍観者も含めて）が親になり、その子どもがいじめ問題に直面しています。子ども時代にいじめに向き合ってこなかった、向き合わせてもらえなかったおとなこそがあらためていじめについて話し合わなければなりません。

今度こそ、いじめの調査研究をもとに正しい知識を持って話し合ってほしいものです。

感情論や体験的価値観による話し合いを重ねても、おとなのみならず子どもたちも混乱するばかりです。

名古屋の市教委は、部活動での「弱いな」発言を遺書と照らし合わせていじめと認定したそうです。同じ発言でもいじめと感じるか感じないかは人によりません。名古屋のように異なるのですから、言われることのつらさを伝えてもらえなかった加害者も被害者なのかもしれません。

おとなは明るく元気な子ども像を描きがちですが「つらい」「悲しい」「苦しい」という気持ちを吐き出す大切さを子どもたちに伝えておく必要があります。

集団生活において我慢しなければならないことはあるものの、尊厳を傷つけられる行為を我慢する必要はありません。名古屋の「ズボンを脱げ」と言われた」という情報からは、男子生徒への性的ないじめが自死を招きやすいという研究者の言葉が思い起こされます。

誰もが分け隔てなく大切な存在であるという実感を持つことができれば、命を大切にすることができるでしょう。そのためにはおとなと子どもの両方に分かりやすい人権意識の成就が必要です。

（盛岡市　CAP岩手代表　59歳）